

委託校による応用実習が学生の意識に及ぼす影響

佐伯 英人

The Influence of Applied Teaching Practice at the Public Schools
on University Student's Consciousness

SAIKI Hideto

(Received January 11, 2011)

キーワード：応用実習、公立学校、学生の意識

はじめに

山口大学教育学部のカリキュラムでは、教育実習として2年次に参加実習と参観実習、3年次に基本実習（前期実習・後期実習）、4年次に応用実習を行なっている。この他、2～4年の間に社会福祉施設での介護等体験実習を5日間、行っている。以下、小・中学校教諭免許の取得に関する教育実習の概要を示す（山口大学教育学部教育実習部，2008）。

2年次に行う参加実習は、附属特別支援学校の行事などに2日間、参加し、手伝いをするというものであり、介護等体験実習の一部に位置付けられている。また、参観実習は、3年生が後期に行っている基本実習（後期実習）を2日間、見学し、現場の雰囲気を感じ、学習するというものである。

3年次の基本実習（前期実習・後期実習）は附属小・中学校で行われる実習であり、前期実習を6月に2週間、後期実習を10月に3週間、行っている。前期実習の校種は、副免許に該当する校種、後期実習は主免許に該当する校種である。この基本実習の目的は、教員としての実践力やその他の資質を身に付けることにあり、この間、学生は教育実習生として実際に授業を行ったり、行事や学級経営に参加したりしている。

4年次の応用実習は、山口県教育委員会の協力を得て県内の公立小・中学校が「委託校」となり、2週間、行っている。この実習は、母校実習とは異なるタイプの応用実習であり、本学部では「委託実習」と称している。委託実習の目的は、基本実習で習得した成果を基に、より高度な実践的指導力を身に付けることにある。

1. 問題の所在と研究の目的

2006年7月11日、中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の事項「教育実習の改善・充実」では「いわゆる母校実習については、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である」と述べられており、母校実習には大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題があるという指摘がなされた。このことは、母校

実習とは異なるタイプの応用実習について研究する必要があることを示している。母校実習とは異なるタイプの応用実習に関する先行研究としては、黒崎（2001）や櫻井（2009, 2010）がある。

黒崎（2001）は、主に「校種の違い」を視点として、応用実習に参加した学生の意識について議論している。研究の対象は2000年度に実施された岡山大学教育学部の応用実習であり、調査対象者は小学校教員養成課程と中学校教員養成課程の学生であった。この研究では質問紙法を用いて調査を行い、得られたデータを基に百分率（%）を算出し、小学校と中学校で比較・考察している。なお、実習校は岡山市内の公立小学校と岡山市・倉敷市内の公立中学校であり、これらの学校を「協力校」と称している。

櫻井（2009, 2010）は、学生の成長とそれを支える要因について議論している。研究の対象は東京学芸大学の応用実習であり、研究の手法は数名の学生を対象とした事例研究（授業参観とインタビュー）と100名の学生の記録（応用実習記録）の分析であった。学生の記録（応用実習記録）の分析では、基礎実習（基本実習）と応用実習の記録を比較して考察し、全体の成長の傾向をとらえている。また、全体の成長の傾向と数名の事例研究との共通点を見出し、考察している。なお、2010年度の実習校は、東京都の50区市町村の288校の公立小学校であった（東京学芸大学学務課教育実習係、私信）。

本学部の応用実習（委託実習）の場合、黒崎（2001）と同様、実習校に小学校と中学校といった「校種の違い」がある。その他、参加している学生には、男性・女性といった「性の違い」、学校教員養成課程と非養成課程といった「所属の違い」がある。また、山口県内の各地（岩国市～下関市）に委託校があるため、学生は県内全域に出向いており、黒崎（2001）よりも学生の分散の程度が大きく、「地域の違い」がある。そこで、黒崎（2001）で視点とされた「校種の違い」に加えて、「性の違い」、「所属の違い」、「地域の違い」を視点として研究し、委託実習が学生の意識に及ぼす影響に関する知見を得ることを第1の目的とした。さらに、本学部の基本実習に関する研究として佐伯（2007, 2008a, 2008b）がある。これらの研究の結果と本研究で得られた委託実習の結果を比較・検討し、議論することを第2の目的とした。

2. 研究の対象と調査の方法

2-1 研究の対象

本研究の対象は2008年度に行われた委託実習である。実施期間は、下関市が5月26日～6月6日、その他の市町は6月2日～6月13日であった。本学部の第4学年の在籍者数は308名（養成課程139名、非養成課程169名）であり、その中の176名が委託実習へ参加した。委託実習の参加者176名のうち、幼稚園で実習を行った13名と特別支援学校で実習を行った11名を分析から除外して、調査の対象を小・中学校で実習を行った学生152名（養成課程101名、非養成課程51名）とした。

2-2 調査の方法

調査対象者152名に対して、実習を終了した時点で質問紙による調査を実施した。質問項目は、教育実習が学生の意識にどのような影響を及ぼすのかを測定する目的で自作した（表3：因子分析を行った結果）。質問紙では「次の項目について、委託実習をして、感

じていることや思っていることを答えてください。それぞれの質問において、あてはまる番号に一つずつ○をつけてください。」という教示を行い、5件法で回答を求めた。なお、5件法は「まったくあてはまらない（1点）、あまりあてはまらない（2点）、どちらともいえない（3点）、だいたいあてはまる（4点）、とてもあてはまる（5点）」とした。また、質問紙には調査対象者の性別、所属、実習校名を記入する欄を設定し、回答してもらった。

3. 回答者の属性

調査対象者152名中、回答者は120名（回収率：78.9%）であった。なお、本研究では、回答者が委託実習を行った市町を基に旧教育事務所が管轄した地域にまとめ、①～⑦の地域別のグループをつくった（表1）。回答者の属性と人数を表2に示す。

表1 地域別のグループ

地域	旧教育事務所	回答者が委託実習を行った市町
①	岩国	岩国市
②	柳井	柳井市
③	周南	周南市、下松市、光市
④	防府	防府市、山口市、阿武郡阿東町
⑤	厚狭	宇部市、山陽小野田市
⑥	下関	下関市
⑦	萩	萩市

表2 回答者の属性と人数

	グループ	人数
性	男子	52
	女子	68
所属	養成課程	76
	非養成課程	44
校種	小学校	41
	中学校	79
地域 (旧教育事務所の管轄地域)	① 岩国	18
	② 柳井	1
	③ 周南	13
	④ 防府	50
	⑤ 厚狭	13
	⑥ 下関	17
	⑦ 萩	8

4. 因子分析の方法と結果

佐伯（2007）では、前期の基本実習のデータを基に因子分析を行い、尺度を作成した。その後の研究では、この尺度の信頼性が確認されたため、そのまま尺度として用いてきた（佐伯，2008a 2008b）。まず、本研究の尺度として佐伯（2007）で作成した尺度を用いることができるのかについて検討した。委託実習のデータを用いて、各尺度のCronbach

の α 係数を算出したところ、尺度の一つ「教育活動をすることの難しさやたいへんさを感じる心」が $\alpha = 0.61$ と低い値を示した。そのため、本研究では佐伯（2007）で作成した尺度をそのまま用いることはせず、改めて因子分析を行うことにした。

因子分析は、統計解析プログラムSPSS 10.0を使用した。因子抽出法には主因子法を用い、固有値が1以上であり、固有値の落ち込みがみられるところまでを抽出の基準とした。その結果、基準を満たす因子が3つ得られたので、3因子構造と判断した。そこで、因子の回転（Promax回転）を行い、因子負荷量の低い項目（絶対値0.40未満）を削除し、再度、因子分析を行った。この手順を因子負荷量の低い項目がなくなるまで繰り返した。そして、得られた第1因子を「向上心」、第2因子を「子どもとの良好なかかわり」、第3因子を「授業をするおもしろさ」と命名した（表3・4）。

さらに各尺度の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、「向上心」は $\alpha = 0.89$ 、「子どもとの良好なかかわり」は $\alpha = 0.83$ 、「授業をするおもしろさ」は $\alpha = 0.77$ であり、それぞれ信頼性があることが確かめられた。

表3 因子分析の結果

項 目	因子負荷量		
	第1因子	第2因子	第3因子
今後、大学で授業や研究以外の活動を頑張ろうと思う。	0.82	-0.02	-0.07
今後、自分の教養を広めようと思う。	0.82	0.04	-0.09
今後、教科の専門性を高めようと思う。	0.77	-0.04	0.02
今後、大学の授業を頑張っうけようと思う。	0.75	0.07	0.11
今後、大学で研究を頑張っしようと思う。	0.74	-0.03	0.03
今後、大学以外の場での活動を頑張ろうと思う。	0.72	-0.06	0.01
子どもとかかわるのは、楽しい。	-0.03	0.99	-0.14
子どもとかかわるのは、おもしろい。	-0.01	0.93	-0.08
以前より子どもが好きになった。	0.19	0.62	0.08
子どもとうまくかかわることができた。	-0.17	0.57	0.09
子どものようすが分かった。	0.03	0.49	0.11
授業をするのは楽しい。	-0.09	0.08	0.92
授業をするのはおもしろい。	-0.04	0.07	0.75
授業をうまく展開することができた。	0.01	-0.17	0.59
授業づくりのおもしろさが分かった。	0.21	0.06	0.54
寄与率 (%)	28.99	18.17	10.59

(主因子法・Promax回転)

表4 因子相関行列

因子	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	1.00	0.18	0.20
第2因子	0.18	1.00	0.32
第3因子	0.20	0.32	1.00

(主因子法・Promax回転)

5. *t* 検定及び分散分析の方法と結果

5-1 尺度の得点の計算方法と *t* 検定及び分散分析の方法

まず、尺度の得点の計算方法を示す。先の因子分析で抽出した3つの尺度の得点は、最低得点を0とするために、各項目の合計得点から項目数を引いて算出した。各尺度の得点の最高得点と最低得点は次のとおりである。「向上心」の場合は6項目、回答は5件法（1点～5点）であるため、最低得点が0点（得点の和の最低値6－項目数6）、最高得点が24点（得点の和の最高値30－項目数6）となる。「子どもとの良好なかかわり」の場合は5項目、回答は5件法（1点～5点）であるため、最低得点が0点（得点の和の最低値5－項目数5）、最高得点が20点（得点の和の最高値25－項目数5）となる。「授業をするおもしろさ」の場合は4項目、回答は5件法（1点～5点）であるため、最低得点が0点（得点の和の最低値4－項目数4）、最高得点が16点（得点の和の最高値20－項目数4）となる。

この方法で算出した得点を基に性の違い、所属の違い、校種の違い、地域の違いに着目して分析した。性の違い、所属の違い、校種の違いについては、それぞれ対応のない *t* 検定を行った。また、地域の違いについては1要因分散分析を行った。分析には統計解析プログラムSPSS 10.0を使用した。

5-2 *t* 検定及び分散分析の結果

5-2-1 性の違いによる意識の得点比較

性の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のない *t* 検定を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、3つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。対応のない *t* 検定を行った結果を表5に示す。「子どもとの良好なかかわり」において男性と女性間に有意な差がみられ、女性の得点が男性の得点よりも高かった ($t(116) = 2.01, p < 0.05$; 女性 > 男性)。

表5 性の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	<i>t</i> 値	<i>p</i>
「向上心」	男性	50	116	20.82(4.51)	0.59	n. s.
	女性	68		21.26(3.61)		
「子どもとの良好なかかわり」	男性	50	116	16.46(3.12)	2.01	*
	女性	68		17.50(2.49)		
「授業をするおもしろさ」	男性	51	117	11.65(2.29)	0.54	n. s.
	女性	68		11.90(2.67)		

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

5-2-2 所属の違いによる意識の得点比較

所属の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のない *t* 検定を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、3つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。対応のない *t* 検定を行った結果を表6に示す。各尺度において有意な差はみられなかった。

表6 所属の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	t 値	p
「向上心」	養成課程	74	116	21.35(3.72)	0.97	n. s.
	非養成課程	44		20.61(4.45)		
「子どもとの良好なかかわり」	養成課程	75	116	17.07(2.86)	0.04	n. s.
	非養成課程	43		17.05(2.77)		
「授業をするおもしろさ」	養成課程	75	117	12.00(2.66)	1.20	n. s.
	非養成課程	44		11.43(2.20)		

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

5-2-3 校種の違いによる意識の得点比較

校種の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のない t 検定を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、「向上心」と「授業をするおもしろさ」において等分散が仮定されたが、「子どもとの良好なかかわり」においては等分散が仮定されなかった。対応のない t 検定を行った結果を表7に示す。「子どもとの良好なかかわり」において小学校と中学校の間に有意な差がみられ、小学校の得点が中学校の得点よりも高かった ($t(113.95) = 5.12, p < 0.001$; 小学校 > 中学校)。また、「授業をするおもしろさ」において小学校と中学校の間に有意な差がみられ、小学校の得点が中学校の得点よりも高かった ($t(117) = 3.61, p < 0.001$; 小学校 > 中学校)。

表7 校種の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	t 値	p
「向上心」	小学校	40	116	22.00(3.77)	1.81	n. s.
	中学校	78		20.60(4.06)		
「子どもとの良好なかかわり」	小学校	40	113.95	18.45(1.36)	5.12	***
	中学校	78		16.35(3.10)		
「授業をするおもしろさ」	小学校	40	117	12.90(2.09)	3.61	***
	中学校	79		11.23(2.53)		

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

5-2-4 地域の違いによる意識の得点比較

まず、地域の人数が10人以下の2地域(②の柳井と⑦の萩)を除外して、性と地域の関連性、校種と地域の関連性について検討した。表8は性と地域の人数、表9は校種と地域の人数である。これらの値を用いて、Fisherの正確性検定を行った。なお、分析には統計解析プログラムR 2.10.1を使用した。その結果、性と地域の間には有意な関連はみられなかった ($p = 0.565$; n. s.)。また、校種と地域の間には有意な関連はみられなかった ($p = 0.103$; n. s.)。性や校種の偏りが地域にみられなかったため、男性と女性を区別せず、また、小学校と中学校を区別せず、地域間の得点比較を行うことにした。

次に、地域の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに1要因分散分析を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、3つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。1要因分散分析を行った結果を表10に示す。各尺度において有意な差はみられなかった。

表8 性と地域の人数

	地域				
	① 岩国	③ 周南	④ 防府	⑤ 厚狭	⑥ 下関
男性	5	5	24	7	8
女性	13	8	26	6	9

数値：人数

表9 校種と地域の人数

	地域				
	① 岩国	③ 周南	④ 防府	⑤ 厚狭	⑥ 下関
小学校	6	7	14	2	9
中学校	12	6	36	11	8

数値：人数

表10 地域の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	F値	p
「向上心」	① 岩国	18	4 104	20.17(5.58)	1.09	n. s.
	③ 周南	13		22.00(2.27)		
	④ 防府	50		21.40(3.02)		
	⑤ 厚狭	12		19.17(6.73)		
	⑥ 下関	16		20.81(3.89)		
「子どもとの良好なかかわり」	① 岩国	18	4 105	16.61(2.83)	2.36	n. s.
	③ 周南	13		18.54(1.39)		
	④ 防府	50		16.80(3.14)		
	⑤ 厚狭	13		15.69(3.25)		
	⑥ 下関	16		18.00(1.83)		
「授業をするおもしろさ」	① 岩国	18	4 105	11.28(2.59)	2.47	n. s.
	③ 周南	13		13.08(2.10)		
	④ 防府	50		11.54(2.82)		
	⑤ 厚狭	13		10.54(1.51)		
	⑥ 下関	16		12.56(1.63)		

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

6. 基本実習と委託実習の比較

佐伯（2007）では、前期の基本実習のデータを基に因子分析を行い、尺度を作成した。その後の研究では、この尺度の信頼性が確認されたため、そのまま尺度として用いてきた（佐伯，2008a 2008b）。しかし、本研究では、先に述べたように佐伯（2007）で作成した尺度を、そのまま本研究の尺度として用いることができず、改めて因子分析を行い、尺度を作り直している。そのため、基本実習を分析して得られた結果（佐伯，2007 2008a 2008b）と直接、比較することはできにくい。しかし、本研究で作成した尺度「子どもとの

良好なかかわり」の項目と佐伯（2007）で作成した尺度「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」の項目は5項目中4項目が同一の項目である（表11）。そこで、2つの尺度を内容的に同じものとみなし、以下、比較する。

表11 尺度の項目比較

尺度	本研究で作成した尺度 「子どもとの良好なかかわり」	佐伯（2007）で作成した尺度 「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」
項目	子どもとかかわるのは、楽しい。 子どもとかかわるのは、おもしろい。 以前より子どもが好きになった。 子どもとうまくかかわることができた。 子どものようすが分かった。	子どもとかかわるのは、楽しい。 子どもとかかわるのは、おもしろい。 以前より子どもが好きになった。 子どもとうまくかかわることができた。

本研究では「子どもとの良好なかかわり」において男性と女性の間に有意な差がみられ、女性の得点が男性の得点よりも高かった。一方、佐伯（2007）では「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」において男性と女性の間に有意な差がみられ、男性の得点が女性の得点よりも高かった。これは、本研究で得られた結果と異なる結果である。

また、本研究では「子どもとの良好なかかわり」において小学校と中学校の間に有意な差がみられ、小学校の得点が中学校の得点よりも高かった。一方、佐伯（2007）では、「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」において、A小学校とB中学校の間に有意な差がみられ、A小学校の得点がB中学校の得点よりも高かった。また、佐伯（2008a）でも、同尺度において、小学校の得点が中学校の得点よりも高く表出した。これらは、本研究で得られた結果と同様の結果である。

7. 考察

7-1 性の違い、所属の違い、校種の違い

本研究では、性の違いを視点として研究した結果、「子どもとの良好なかかわり」において男性と女性の間に有意な差がみられ、女性の得点が男性の得点よりも高かった。このことは、女性の方が男性よりも子どもとうまくかかわることができたことを示している。

また、所属の違いを視点として研究した結果、いずれの尺度においても養成課程の学生と非養成課程の学生の間には有意な差はみられなかった。このことは、養成課程の学生と非養成課程の学生の間に明瞭な違いがみられなかったことを示している。

さらに、校種の違いを視点として研究した結果、「子どもとの良好なかかわり」と「授業をするおもしろさ」において、それぞれ小学校と中学校の間に有意な差がみられ、小学校の得点が中学校の得点よりも高かった。「子どもとの良好なかかわり」については、児童・生徒の発達段階の違いが、学生とのかかわり方の違いとなり、表出したものと考えられる。「授業をするおもしろさ」においては、児童・生徒の発達段階の違いによる影響を受けたことが一面として考えられるが、中学校には中学校の授業ならではの楽しさがあるはずである。「授業をするおもしろさ」の得点が中学校で低く表出した理由については、今後、調査を継続し、明らかにしていく必要がある。

7-2 地域の違い

地域の違いを視点として研究した結果、いずれの尺度においても各地域の間に有意な差はみられなかった。このことは、各地域の間に明瞭な違いがみられなかったことを示している。各地域の間に明瞭な違いがみられなかったことは、ある特定の地域で実習を行った学生がポジティブな意識をもったり、また、ネガティブな意識をもったりしていないことを意味している。県内の各地に広く分散して実習を行っている委託実習の場合、各地域の間に明瞭な違いがみられなかったことの意義は大きい。

7-3 基本実習と委託実習

本研究では「子どもとの良好なかかわり」において女性の得点が男性の得点よりも高かったが、佐伯（2007）では「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」において男性の得点が女性の得点よりも高かった。これは、本研究で得られた結果とは異なる結果であり、結果が一致していない。このことから、性別によって何らかの傾向があるとはいえない。

また、本研究では「子どもとの良好なかかわり」において小学校の得点が中学校の得点よりも高かった。佐伯（2007）では「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」においてA小学校の得点がB中学校の得点よりも高かく表出し、また、佐伯（2008a）でも、同尺度において小学校の得点が中学校の得点よりも高く表出した。本研究においても先行研究（佐伯，2007，2008a）と同様の結果が得られていることから、基本実習・委託実習の別なく、小学校の得点が中学校の得点よりも高く表出する傾向があるといえる。

おわりに（今後の課題）

本研究では、委託実習が学生の意識に及ぼす影響の一端を明らかにすることができたが、この研究で得られた結果が例年、みられることであるのかどうかといったことは明らかになっておらず、今後、継続して研究していく必要がある。

謝辞

ご指導・ご助言いただきました山口大学教育学部の松田信夫氏、小杉考司氏に感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 黒崎東洋郎（2001）：学生から見た「応用実習」の効果，岡山大学教育学部研究集録，第118号，1-7.
- 佐伯英人（2007）：教育実習が学生の意識に及ぼす影響（Ⅰ），山口大学教育学部研究論叢，第57巻第3部，67-74.
- 佐伯英人（2008a）：教育実習が学生の意識に及ぼす影響（Ⅱ）－養成課程の学生の意識の変化について－，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第25号，1-9.
- 佐伯英人（2008b）：教育実習が学生の意識に及ぼす影響（Ⅲ）－非養成課程の学生の意識

- について－，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第25号，11-16.
- 櫻井眞治（2009）：基礎実習と応用実習を通じた教育実習生の成長とそれを支える指導，東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，第5集，41-50.
- 櫻井眞治（2010）：基礎実習と応用実習を通じた教育実習生の成長とその要因の考察－授業実践に焦点を当てて－，東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，第6集，31-39.
- 山口大学教育学部教育実習部（2008）：平成20年度 教育実習の手引き.